

「最後のナゴヤ球場」 （九六年十二月）

今日、両親を連れて野球の試合を見に行った。しかしながらこの私。野球をお金を払って見に来たのは、これが初めて。過去この球場に、試合の観戦の為に足を運んだのは、小学生の時に家族で来て以来、実に二十六年振りという具合である。物心付いてからの私の少年時代の記憶には、常にラジオでドラゴンズが試合に負けていると、家中、特に母親に怒鳴り散らす父親の存在が実に印象的で、故にプロ野球が大嫌いになったという思いすらある。（そのくせに高校では野球部にもいたが）でも今でも、移動中のラジオや、帰宅後にTV等でプロ野球中継を観戦するという事はめったにない。でも何故今回に限り、わざわざ朝のプレイガイドに並んでまでしてチケットを買い求め、野球場まで足を運ぶ気になったのか？

理由はふたつある。

僕の「慎一」という名前は、僕が生まれた当時にドラゴンズでも活躍していた「江藤慎一」という選手から、父親が勝手に頂いた物である。今までずっとプロ野球嫌いで通して来た物だから、随分とこの名前を恨んだりもした。（故に、ペンネームでは、「真」のみをとって「まこと」にする事にもした）でもその選手のグラウンドでプレイする姿というのを、当然ながら一度も見えていない。出場選手のリストの中に、「ご本人の名前を見た際、これが最初で最後の機会ではないかと思つた事。もう一つ。母親が昔から随分と、同い年でもある長嶋茂男をこひいきにしていたものの、実物にはまだ一度もお目にかかつてなかったというのがある。TVではないナマの長嶋茂男の、しかもグラウンドでプレイする姿を一目見せてあげたかった。（結果、エラーばかりの守備であつたとしても）

当日はあいにくの、時折雨が落ちてくる寒い中。おまけに僕が買った席が内野席で、ダイヤモンドからかなり離れてしまつていた為に、背番号でしか誰だか確認出来ない様な状況ではあつたが、それでも本人が移動すると大勢のカメラマンがそれに続いて大移動していたのでよく分かつた事が幸いした。それにこの、公式戦でもないのにこの大観衆の賑やかさが退屈させない。僕自身はそれ程には、この野球場には思い入れは無いのが、実際に手際良く大勢のお客をさばくライメン屋の女将や、こっちは皮ジャン着てもまだ寒いというのに、半袖で頑張る売り子のアルバイト。ちゃんと捨てずに持っていたのか？と思わせる「宇野勝」の応援旗。長嶋以外にも「背番号3」をつけたジャイアンツの選手を「誰だ？」とつぶやくと、すぐ前の席の見知らぬ人が「千葉茂といって、長嶋の

前に背番号3を付けていた人だよ」と教えてくれたりと、この日でお別れとなるこの球場もしかしだが、「野球」というスポーツが、実に多くの人達に愛され続けて来たんだとい

う事を、現場に来てみて改めて実感した次第である。良くも悪くも、父親の時代には、野球でしか、エネルギーを発散させる対象は無かったのだ。試合が終わり、一通りのセレモニーが終了して帰路に就くまでの間、結局僕だけが「寒い」を発して、両親からはその言葉はついに無かった。スタンドで、親子で食べたラーメンは、本当に温かく、美味しかった。

「シトロエンと私」(九六年一月)

僕には、誠にお金のかかる相棒がいます。とは言っても、残念ながら彼女ではありません。愛車にしている「シトロエン」の事です。もう丸九年に渡る付き合いですが、この年の歴史はそのまま故障との歴史で、毎年の様に年二回、もしくはそれ以上、車検並みの出費を余儀なくされ続けて来ました。(よく今までお金がもったものだ)

フランスとイギリスの古い車は電気関係が弱い。とはよく言いますが、この車の場合もご多分に漏れず、今月初めにエンジンがからなくなつて修理屋さんに引つ張つてもらつて入庫の憂き目に遭い、三日後に直つたと思いきや、二日後の朝に再び再発。今度は一週間かけて徹底的に診てもらい、つい昨日、再び元気になつてめでたく退院して来ました。すると、僕の方も能天気なもので、さんさんお金がかかった事や、いざという時に「足」として役に立たなかったもどかしさに、相手がいない時は「もうやめようかなあ」と思い続けて来ても、再び元気になつて、シトロエン独特のハンドリングや、あの有名なハイドロニューマチックの乗り心地に再び魅せられてしまうと、苦勞して来た事などすっかり忘れて、いつまでも一緒に走り続けていたくなってしまう。

「わが命！」とまではいかないものの、陰ではブツブツ言いながらも、一緒にいるといかにも仲良しの間柄つて、貴方の身近にもいませんか？

車と人間関係を同じ考えで比較するのもどうかとは思いますが、少なくとも僕には、わがシトロエンにあてはめる事で、比較対照する環境にはあると思っています。ましてや人と人との関係であるならば、今の世の中に全ての面において共通の価値観を有する関係など不可能と言つてもいいでしょうし、現実になんかあったなら、逆に摩擦が無くて面白くも何ともないのでは？と思います。一つの個性が一緒にいる以上、必ずどこかで「犠牲」が生じる事でしょうが、それは必ずしも貴方だけではないと思います。相手の為に(たとえブツブツ言いながらも笑)苦勞出来る事を苦とは思わなくなり、喜びに変えられる気持ちのゆとりを持てる程になれた時に、改めて得られる喜びも何かきつとあると思っています。僕のシトロエンを女性に例えれば「ハラが立つ程の浪費家」でしょうか？ヒトの事言えない)でもそれだからこそ得られる快感？も捨て難いからこそ、ブツブツ言いながらも相手してしまふ「分」が好きである」というのもあるでしょう。その「快感」が欲しいからこそ、の為に必要な「苦勞」を苦勞と思つてはいけないし、又それを惜しんではいけない。

でもあくまで相手は、それ以上でもそれ以下でも無い「物」ですから、どこかで必要に迫られた時には、別れる覚悟もしなければならぬ。今まで何度も重傷的なトラブルに遭遇して来て、その都度「最早これまでか？」と思いつつも、危機を乗り越えてなんとか現在、良好な関係を保っています。

シトロエンも大事ですが、今までこの車の注いできた愛情を、いつでも誰かに同じだけ注ぐ事の出来る自分になりたいと思っています。

「最高の瞬間」(一) 「感動を生み出す心」

昨年の僕は、それまで勤めてきた会社を退職して、一時期のんびりと過ごしていた時もあつたりで、TVを通じてさまざまな感動を目の当たりにする機会に恵まれたと思っっている。オリンピック、高校野球プロ野球・・・それら全てがスポーツの世界である。

ただでさえ四二・一九五〇を走りきるだけでも大変な事だというのに、しかもあの暑さの中、世界のトップレベルを相手に銅メダルを見事獲得した有森選手の走り、そして昨年の流行語大賞にもなった「自分で自分を誉めてあげたい」は、僕も恥かしながら目頭を熱くさせた。

サッカーでブラジルを破ったあの試合も忘れられない。次々と襲い掛かるブラジル選手の鋭いシュートを見事に押え込んだキーパー川口選手あの猛烈に気合いの入った形相は、ブラウン官越しだという事すら忘れてゾクツ！とさせたとし、高校野球の決勝戦では、“浜風”をも見方につけてしまった優勝校監督の冷静な判断もあるが・あの”最悪”の場面で、見事なストライクをライトから返球してみせたあの選手の力というのも、見事しか言いようが無い。

僕も六年程前まで、長い間ゴーカートのレースに情熱を燃やしていた時期があつた。あれとて、れっきとした「モータースポーツ」であり、一つ一つのコーナーを攻める時に求められる集中力や、横Gに耐えながら正確な操作を出来るだけの体力。結果としてタイムを出す為に必要なプロセス、そしてそれを踏まえた上で相手に「勝つ」為の「駆け引き」等等、道具が占める割合が他に比べて若干高いとは思ふものの、他のスポーツ同様に、少なくともその道具を「自分の手足の様に」自由に振り回すだけの技術が無ければ、最低限楽しむ「事すら出来ない」と僕は思っている。でもその代わり、全ての歯車がつまぐ噛み合った時は、いいタイムが出るだけでは無く、人間とカートがまるで一体になったかの様で、何よりも「風になる」とでも形容すればいいのか・・・スピードに乗れば乗る程全ての力「加速や減速、横G等」はゆるやかに上下し、自ずと丁寧な操作をする様になる。(だって「体の一部」なんだから)タイヤはコーナーを、常にグリップの限界ギリギリの所で捕らえていてくれているという、際どい状況の中、当の本人はというと、まるで麻薬でもやったかの様に、その状況にすっかり「酔っていた」記憶がある。

レースから引退した後、自ら走る事から遠ざかった僕は、それを体験出来なくなつて、体を休める余裕はずっと出来たというのに、むしろ余計にストレスを感じた程だ。

ちよつと昔。現巨人監督の長嶋茂男氏がドリンクのCMの中で「ブレッシャーは誰にもありますよ。でも緊張してはいけない。それを『楽しむ』事が出来れば、その人は本物

です」と言っていた言葉が、未だに僕の心の中に強烈に記憶されている。本当にその通りだと思う。過去の名選手の言葉を辿っても、「打撃の神様」川上哲治は「調子のいい時にはボールが止まって見える」と言っていたそうだし、長嶋茂男に至っては、ボールの、更に芯であるコルクが見えていたそうである。

名前は忘れたが、現在の女子プロゴルフで活躍している選手の中にも「調子のいい時には、打った瞬間に、アイアンとボールの間に何本の芝生が挟まれたかがよく見えて、次の瞬間にはどこにボールが落ちるのかがもう分かる」と言った人がいる。

逆に言えば、そこまで分かるからこそプロになれたのだろーし、逆にクラブのフェース面にシールを貼って、球が当たった跡でしか確認出来ない様だからこそ、僕はいつまで経ってもゴルフがうまくないんだという見方もあるにはあるが・・

他にも、例えばピアニストの中村紘子さんが、「ステージで演奏している時には、ヘアピン一本が落ちてても私には聞こえる」というのを何かで読んだ事がある。

その分野に於いて最高の技術を身に着けた人が、気が遠くなる程神経を集中させたその瞬間には、我々凡人には見えない何かがあるに、彼らには見えているんだと僕は信じている。一般人の人ならば「苦しい」と逃げてしまう様な状況の中を、磨き抜かれた「心」が新たな可能性や芸術を生み出しているのだと僕は思っている。

例えば先に挙げた長嶋茂男に至っては、「記録」よりも「記憶」に残る選手である。一打逆転、サヨナラのチャンスという、普通の人間ならば重圧に押し潰されそうな場面になればなる程、当の本人はというと、そういう環境を「楽しんで」見事観客の期待に答えていたのである。僕の生涯にもたった一度だけ、その素晴らしい瞬間にめぐり逢えた事があった。

「最高の瞬間」(二)「トップだ！僕の前には誰もいない！」

今から約6年前の5月だった。僕はそれまで足掛け十三年に渡って続けてきたカーターのレースを、諸々の事情により、事実上引退を決める覚悟で、最後のレースに望んだ。GWの最中に行われたレースだったので、忙しい仕事の合間に疲れを引きずって望んでいた(半ば意地で続けていた様なものである)時とは違い、前日にしっかりと練習走行を重ね、整備もきちんと出来た上、たっぷり睡眠をとったという、それをスपोर्टとして望むのであれば当たり前(でも出来なかった)をきちんと済ませた上

で望んだ当日の朝、珍しく誰に起こされたわけでも無く朝の5時前に目を覚ました時点から、その日の僕はいつもと違っていた。山奥に作られたサーキットに到着した時から、いつもと違う空気に包まれているのを感じた。いや、今までそこはずっと同じだったかも知れない。今日を最後のレースだと心に決め、今日という日の全てを心に深く刻んでおこうという僕自身の気持ち、全てを新鮮に感じさせたのだと思う。今までずっと当たり前だった緑の山々、清々しい空気、そして多くの仲間に囲まれて、速くは走れはしなかったが、それでもそれまで楽しくやってこれた事に心が幸せを感じた。誰にでも素直に贈れた笑顔に、逆に誰もが「今日で最後だと言うのにどうしたんだ？」と不思議な顔をして僕を見つめたが、僕自身にもそれは分からなかった。

当日のレースに際して、いつもと違っていた事がもう一つあった。僕の所属していたチームには、僕と同じ年でN君という仲間がいた。僕から約2年遅れてレースを始めた彼は、恵まれた才能と有り余るガッツを武器に、あつという間も無く上へ上へとの上上がり、何年もの間、チームのエース・ドライバーとして、長い間を全日本選手権(の中でも更に最高峰のフォーミュラ・カートというクラス)で活躍していた。逆に僕は才能の無さから、ずっとローカルの選手権で走っていた為に、10年以上に渡り付き合いがあったというにも関わらず、一度も一緒に走った事が無かった。今回の僕にとつて最後のレースに、久々に彼が走り来ると言うので、それを聞いて以来、心の中で僕は密かに期待を寄せていた。「Nと一緒に走れたらいいなあ・・・」前日の晩は、才能のギャップなど考えもせず、彼とのバトルをシュミレートしながら眠りに就いた物だった。

だが、その「いいなあ・・・」は、何と本当になってしまった。70台以上がひしめくそのクラスの中。三つのヒートに別れて行われる事になった決勝レースの一つの中で、何と彼がポール・ポジションから、僕がそのすぐ隣からスタートする事になったのである。「まさか」が本当に実現してしまったのである。

スタートを前にしたわずかな時間の中で、僕はほんの些細な事でも悔いとして残る事の無い様、出来る事の全てをやるうとした。規定の重量ギリギリでゴール出来る程度にまでタンクの燃料を抜き、マシンのセツトアップを改めて確認し、交換出来る消耗品は全て取り替えた。緊張の余りつい煙草に手を伸ばしたかったが、レースが終わるまでは我慢した。

そしてついに最後の瞬間がやって来た。さっきまで恐い顔をしながら緊張していた自分とは打って変わって、自分でも不思議な位に冷静になっていた自分に気が付いていた。自分の後ろに待ち構える24台のマシン。して隣には「あの」N君。周りの仲間の誰もが、冷笑ともとれる笑顔で僕の方を見ていてくれたが、(実績を考えれば仕方ないが)もうそれすら気にはならなかった。ただひたすら、僕がそつと決めた「最

後のレース」に際して、この上無い舞台を用意してくれた神様に対して、僕は誰に知られる事も無く、手を握ってそっと天を仰ぎ、神様に感謝をした。

「用意して！」コース員の声が響いた時、僕の神経はさっきまでの穏やかな気持ちから一転して「獣」と化した。さっきまで輝いて見えていた山の緑や、仲間の笑顔、最後のレースの最後の舞台という猛烈な緊張すらも自分へのエネルギーにと変わり、Nを「撃墜」する為だけに神経が集中された。自分の心の中で、自分にすら押さえ切れないパワーが湧き出て来るのがよく分かった。

2周のウォームアップの為のローリングからホーム・ストレートへ。スタートはポールの選手が優先されるが、僕はそれに100分の1秒でも遅れまいと、右足つま先に全神経を集中させた。

「スタート!!」

と同時に、Nは1コーナー進入への最適ラインをとる為に、接触ギリギリで僕の前に塞がり、僕は300mと離れないテール・トゥ・ノーズで1234とコーナーをクリアしていった。その後、ヘアピン・カーブまでは約500mのストレート。相手は思ったより突き放しはしなかったが、僕も思ったよりストレートの伸びが悪い。ベストな状態の時の「風になる」様な加速が無い。相手が調子を上げる前に勝負に出るしかもう無かった。

100km/h以上のスピードから一気にフル・ブレーキングして突入する5コーナーのアプローチに、全てを賭けた。

突入！の際、Nがアクセルを足から離す瞬間が、真後ろで見えないはずの僕にははっきりと分かった。してそれは僕がブレーキングを始める地点より少し前だった。

「勝てる!!!」

僕は迷わずアクセルを踏みつけたまま、減速体制に入った彼のインに突入。彼が丁度真横に並んだ所でブレーキングしながらコーナリングに入り、出口が見えた所ですぐさま加速。彼の前に出る事に成功した。ギリギリのプレッシャーの中で更に「自分の限界を超えた」世界の中から無理矢理掴んだ「勝利」の喜びは、性的快楽にも等しいと、未だ持つて言える程の快感であった。

初めて体験した「トップ」の世界は、異様だった。29台も走っているというのに、自分の走っている音しか聞こえてこない、静かな世界だった。当たり前だが、目の前に

は誰も走っていない。でもコースの脇に陣取る観客の全てが僕の方を見ているのがよく分かった。チームメイトに至ってはもう飛び上がったの大喜びである。初めて体験する静寂と栄光のギャップに戸惑いながらも、何とか再び「守り切ってやる！！」と気合いを入れ直して、コントロール・ラインを通過した。

が、「幸か不幸か」僕にとってのレースはそれからわずか6秒後に終わった。ついさっき迄劇的なドラマを演じる事が出来た5コーナの手前、バック・ストレートへと続く4コーナーで、僕のわずかなスキを突いて今度はN君がアプローチを仕掛けてきた。元全日本F.K.Dライバーののブライドを痛く傷付けられた彼が怒って、猛然と仕掛けて来たのだが、少し無謀過ぎた。コーナスピンして戦線を離脱。後に続いていた「台のマシンがもの凄い音であつという間に駆け抜けていたその瞬間に、再びスタートさせる事は出来たものの、僕の最後のレースは呆気なく終わりを告げた。

でも悔いは無かった。正直に何よりも、「自分の力を100%出し切った」という満足があつた。レース終了後に、いつもならニツクネームで僕を呼ぶ（余り有り難く無い名前なので伏せておきます）彼が僕を珍しく名前で「K君、悪かったな」と謝って来た。「いいいよいよ、楽しかったよ」と心から返す事が出来た。観戦していた現役の全日本選手数名からも「あれは凄かった！」他、永年レースに於いては「師匠」と仰いでいたカート屋の主人からも「よくあそこまで突っ込んで止まれたなあ」と絶賛を受けた。確かにその反面で「無謀」と受けた人もいないではなかったが、気にもならなかった。

「最高の瞬間」(3) 「幸か不幸か」の理由

「幸か不幸か」と言ったのには訳がある。正真正銘、一世一代のスーパー・ブレイの末に、僕は見事にN君を抜き去りトップに立つ事が出来た。でも、そのまま残りの周回数、次に遭遇したアクシデントが無かったとしても、恐らく僕はトップの座を守り切る事は出来なかつただろうという事だ。万全を期したつもりでも、いま一つツメの甘かつた僕のマシンは結局ストレートが伸びなかつた為に、抜き去った後でも彼を突き放す事が出来ず、結果として一周に満たない内に彼に攻撃のチャンスを与えるスキを作ってしまった。でも逆に、それが序盤で分かっていたからこそ、最も得意とする5コーナーで勝負に出る氣になつたのだ。スタートから暫くの間、N君の後ろについて行つた限りでは、スピードは、それだけでは「勝てる」とは思えなかつたが、同時に「勝てない」ものでも無かつた。つまりマシンの性能はほぼ同レベルの仕上がりだった訳である。

となれば後はもう僕とN君という「人間同士」の勝負である。となれば、これはもうレースに限った話ではない。ありとあらゆる「人と人」との間で繰り広げられる、武道を始めとするスポーツ同様に「間合い」の世界の話となる。特に一対一の格闘技ならばなおさらだと思つが、「自分のいい所を充分に発揮する」と同時に「相手のいい所を出させない」事が必要だと僕は思っている。

サーキットに於いても、余程相手との差が圧倒的に無い限り、容易に抜き去つて前に出るという事は難しい。でも前を走る選手については、後ろを走る相手の事をよく分かつていたならば、その相手が得意とする所をきつちりと守つて走れば、抜かれる事は無い(過剰なブロックは勿論禁止だが)十の中で例え相手が七勝つていても、その7を発揮させる事をうまく封じ込める事が出来たなら、残りの三で勝つ方法だってあるかも知れないと思う。

いや、必ずあると信じて欲しいと思う。あの時、確かに僕は、互いの実績では比べる由も無いが、走る前から、彼のマシンの性能と自分のそれを比較してみても、(規則上、エンジンと同じ)僕が勝っている所とすれば僕のマシンのブレーキの性能しか無いと思つていた。だから、勝負に出るとすれば最高速度から一気にフル・ブレーキをかける五コーナーしか無いと思つていた。そしてそれは見事に成功してくれた。

その後、お互いは共に「引退」をして、再びサーキットで会い交える事は無くなった。十数年に渡るレース生活の中、たった一度だけの対戦ではあったが、それでも僕にとつては、「チームのエースのNを抜いた」という後々の人生にとって大きな勲章を残す事が出来た。少々無理な解釈と思われても仕方ないが、N君は一度も僕を抜けなかったのである。誠に都合のよろしい「自己満足」かも知れない。

ここにこんな一例がある。75、77、84年と三度のF1ワールド・チャンピオンに輝き、今では自らの航空会社を設立するまでに至っているニキ・ラウダにも、他のグランドライバと同じ様に辛く下積み時代があった。だが大胆な事に、F2からF1にステップアップする際に、彼は自らの生命保険を担保に数千万円に及ぶ借金を銀行からして、その持参金でF1のシートを獲得するに至っている。「もし君が死ななかつたら、誰がこのお金を払ってくれるのかね?」と問い掛ける銀行屋に対し「大丈夫。その時には、僕は必ずワールド・チャンピオンになっていますよ」とまで言つてのけたそうである。何が彼にそこまで言い切る自身を持たせたのだろうか?彼の著書「F1の世界」(二玄社)の中にこうある。

(一部抜粋)「71年のF2のレースの中で、たった一度だけ、エマーソン・フィッティパルディ(72、74年F1チャンピオン。でも当時はF1ドライバがF2のレースに”出稼ぎ”する事が当たり前に行われていた)を抜いたんだ。コーナーの突っ込みで追い抜いたただけだね、でも何しろ既にF1でも有望視されていた彼の最新式マシンに比べ、

僕のマシンと来たら旧式もいい所というシロモノだった。でも僕は彼の前に出た。その後ビットが慌てて「DOWN!」のサインを出した為にひるんで、すぐに抜かれてしまったが、そんな事は問題ではなかった。それだけだ。」

そしてその後、彼は70年代後半、80年代前半を代表する、偉大なる「ハードライブ」と変貌を遂げて行ったのである。僕は今でもよく、知り合いの息子等が高校生位だったりとすると

「一度位は、痛めつけられる程度に鍛えてもらった方が、後の人生には大事だぞ」と言う。

僕自身も、中学時代にプラスチックバンドにいたものの、体力が無くて、時折朝礼が長引くと倒れてしまう類の「もやし」だった。それではいけないと思って、高校入学と同時に野球部に入って、毎日フラフラになるまでシゴかれたが、今でも当時の事は貴重な経験だったと思っている。お陰で、「高給と仕事のハードさで有名な」某宅配会社で11年も働く事が出来たばかりでなく、その合間にカートのレースを続ける事も出来たりしたし、更に言えば、深夜と言える時間に帰宅してから、眠りにつくまでのわずかな時間を積み重ねて、こうしてパソコンも覚える事も出来た。体力はあつて損は無いと、自信を持って言える。

勿論、ニキ・ラウダの成功は、この些細なきっかけを最大限に有効利用した、「走るコンピュータ」との別名を評された彼の人並外れた頭脳に寄る事は言うまでも無い。

インターネットに代表されるメディアの進歩は、僕のように平凡な一市民にええも、全国に情報発信出来る時代を作ってくれた。(残念ながら英語が出来ないので「世界に」ではない・・)でも今も変わらず、スポーツは僕らの少年時代と変わらぬ感動を与えてくれるだけのパワーを依然として秘めていてくれるから、世間が騒ぐ程に運動不足とか視力の低下云々を懸念する必要は無いと思う。ただ、敢えて優先順位を付けるとするならば、コンピュータの知識よりも、目一杯体を動かして、自らの内に秘められた動的な可能性を、まず先に磨き上げて欲しいと僕は思う。どんな事でもいい。好敵手がいてくれればなおさら良い。相手に負けまいとする過程の中で、極限まで追い込まれた精神と肉体が更に一歩先に狙いを掛けた時、貴方自身が貴方に更なる可能性と喜びを与えてくれると、僕は信じているから。

* 補足 その後「日本一横Gのキツイサーキット」と呼ばれた津保川サーキットは、21世紀の訪れと共に閉鎖となり、かつて「この世に一曲でもいい、歌を送り出すまではここに帰らない」と決めたあの青春の舞台には、二度と戻る事は出来なくなりました。

空想歴史旅行「紅茶とゴルフ」

*ここに掲載する内容は、過去色々な媒体を通じて得た知識を元に、私が勝手に推測して綴った物です。ひょっとしたら不正解があるかも知れませんが、楽しく読んでやってください。筆者より

紅茶にゴルフ、というと、共に英国の伝統を支える大きな二つの代名詞と言えるかも知れない。ゴルフに関してはその紀元は、スコットランドの遊牧民が、モグラの開けた穴に杖を使って石ころを入れて遊んでいたというのが元々の始まりらしい。でも、本当にそんな平和な環境の中で、何かが生まれたりするのだろうか？と僕は疑問に思う。

ことスポーツの紀元においては、その殆どが元々は「人を殺す為」の手段として始まったという説がある。21世紀を迎えようとする今ですら、世界のどこかで内戦等の殺戮が続けられているこの人間社会で、更に昔の時代となると、今我々が「報われない」と思っているこの時代すらも、遠い昔の彼らにとっては、「生かされている」だけでも、幸せの上無い事なのかも知れないのだから。

そんな、いつどこで戦いの火蓋が切られてもおかしくなかった様な世の中で、人々は常に次の戦いに備えて、何か「安全な手段」を用いて、体を鍛えていたという向きも無い事はない。

日本の剣道等はその最も分かりやすい一例だろうし、西洋のフェンシングにおいても同様である。かつて人は、いつか「人を殺す為に」体を鍛えていたのである。

いいか悪いのかの問題ではない。そうしなければ我が身や家族を守る手段の無かった時代が、つい最近までずっと続いて来たのだ。

だからゴルフにしても、ある説によると、元々中国で遠方の適に攻撃をする為の武器として用いられていたという説がある。道具を使う投擲手段の中でも、最も遠く、且つ性格に目標に到達させられるこの打法は、元々中国大陸で「武器」として使用されていた様なのだ。「ゴルフ」という名前も、元々はそれを武器として考案した人の名前から来ているらしい。ある国では「武器」とされていた道具が、他の国に移るなり、「玩具」として広まるのも決して不自然ではないと思う。冬のスキー・ジャンプだって元々は北欧の国での「処刑」の手段だったのが、いつからかスポーツとしても行われる様になったらしい。

ではゴルフが中国を発祥とした場合に、どうやって英国にまで伝わったのだろうか？

「紅茶」というと、アメリカではレモンティーを、イギリスではミルクティー壱を言うらしい。してそのミルクティーの由来はというと、中央アジアの遊牧民が、緑茶に山羊の乳を入れて飲んでいた習慣が移ったらしいのである。

所でおかしな事に紅茶というのは、曰頃我々が口にする”お茶”と呼ばれる物の中で唯一ビタミンBを含んでいない。緑茶を発酵させたものだからである。

カフェイン等の害こそ指摘され、特別何が体にいいとも言われていない紅茶が何故英国で普及してしまったのだろうか？（根拠までは忘れたが、ソウル五輪のマラソンでは紅茶ベースのスペシャル・ドリンクが流行っていた）

誰もが一度は耳にする「料理の歴史は失敗の歴史」という言葉に注目したい。

僕はこんな推測を試してみた。

英国の商人が、中国で緑茶を仕入れ、陸路にて輸送中に、突然の雨に見舞われて大事な商品がズブ濡れになりってしまった。それでも何とか国にたどり着いたものの、袋を開けると緑色をしていたお茶の葉は雨の湿気と、以後の温暖な地方を旅して来た事により、無残な茶褐色へと変わってしまった、味もひどいものになってしまっていた。さてどうしよう。売り物にならないからと、捨ててしまえば大損である。

そこで商人の頭にひらめいたのが、旅の途中で彼が目撃した、遊牧民のお茶を入れる際の風習である。腐った緑茶に、同じ様に山羊の乳を入れて飲んでみる。すると悪くは無かった。

そこで商人は一世一代の賭けに出た。

「本場のあちらじゃねえ、こうして飲むのが今大流行なんだぜい！！」

現地の事を余り知らない英国本国の人には、やがて無理無く受け入れられてしまった。・ホツと胸をなで下ろした商人が、自分が考えたミルクティーを飲みながら、他の仲間達と旅の話にふける時、別の仲間が見たある光景で、話題が盛り上がった。

「そついや、あつちの奴等こんな物使って戦争してたなあ」

それがゴルフである。

次の旅までにはまだ間がある。ちょっと真似してみる事になった。人を目標にする訳には行かないので、何か変わりの物を置いて、それに誰が一番早く当てるかが競争になっていった。商人達の間で広まったこの「時間潰し」は、やがて港から街の人達へ。いつの日が丘を越えたスコットランドの遊牧民にも知られる様になり、山羊を追う合間の中で、適当にモグラの開けた穴を見つけては、仕事の道具である杖を使って、誰が一番早くあの穴

に石ころを入れるかを競う様になっていった・・・

事実によると、英国で「ゴルフ禁止令」が出されたのは15世紀。紅茶が大ブームになったのが18世紀の事だそうである。この事実と、僕の空想をどうかみ合せればいいかというと、以後は言葉に詰まってしまう。でも、今の現代に「当たり前」と思われている事の多くに、ひょっとしたらこの商人の様な苦し紛れのアイデアと、戦争の武器で自分達は遊んでしまおうという遊び心の混在があってもおかしくないと思うし、またそう考えてみるのも面白いと思う。

僕はただ、ゴルフがヘタでもなんとか生きていけるこの時代に生まれ、目覚めの紅茶を一杯口にしてから、事故でも無い限り命を落とす事はないであろう日々を過ごせる事を、ただ神様に感謝するのみである。

参考文献

「あした天気になあれ」ちばてつや少年マガジン

「魁！男塾」宮下あきら少年ジャンプ

「ザ・シェフ」(作者の名前を忘れましたモーニング(漫画ばかりだ笑))

「アイドルど僕」

アイドルと僕TVのアイドルを見ていて、僕はどちらかと言うと、それ程熱く熱狂する世代では最早無い。今頃こんな事からわざわざ切り出すのも何だが、以外や以外、最近新たに売り出されている10代前半のアイドルを支えるパワーの中に、今の僕とさして変わらない年齢層が多い事に驚いている。

「売れる前に」が本当のファンの神髄ではあるらしいのだが、わざわざ新幹線に乗ってまでして遠い土地でライブに出演する彼女達を応援するのもいいが、もう少しそのパワーや「投資」を、自らの可能性を切り開く事へと、少しでも注いでくれた方がいいんじゃないかい？と思うのは僕だけだろうか。

勿論、否定をしているのではない。つい最近に知った事なのだが、何と僕の母親、独身の頃は自ら友達を誘って、あちこち旅しては、あの「美空ひばり」を応援していたという「元祖」追っかけだったと言うのだ。そんな「派手好き」の母親と、地味が服着てると言うにふさわしい父親。その両極端が一つの人格の中に混在して生まれた僕の身にもすこしはなれよなあ！

残念ながらGS（グループ・サウンズ）の頃はちょっと幼かった為によく知らないが、それより少し後の、天地真理、小柳ルミ子、南佐織の頃、僕にはずっと年上の「大人のお姉さん」だったアイドルが、山口百恵、櫻田淳子、森昌子のトリオに代わって「年上のお姉さん」（年上だからお姉さんなんだ）になって少し身近になり、後の「キャンディーズ」に限っては唯一、僕も大ブレイクをしかして大いに熱中させられてしまった。解散コンサートとなった中学卒業の春にはついに居ても立ってもいられずチケットを買い、1万2千人の渦の一人として共に熱狂した。今思い出すと、顔も知らないあれだけの大勢が、たった一つの価値観の中で、あれだけ熱狂できる瞬間って、やっぱり悪くないものだつくづく思う。

そのキャンディーズ解散から数年後、僕にとって忘れられない一つの転機が訪れた。ずっと「年上のお姉さん」だったアイドルは、松田聖子で「同い年」になり、河合奈保子ではついに「年下」へと変わっていった。以後小泉今日子や中森明菜、おニヤン子と続きはするものの、最後に挙げたグループに代表される「シロート臭さ」が逆に災いして、次第に飽きられ、それはやがて「歌番組の崩壊」という結果を迎える事になってしまった。

今、再びアイドルの時代が来ようとしている。かつてアイドル達に熱狂した世代が、再び「裏切られる」事を恐れず、マゴギヤル達の中から生まれた新たな原石達へと期待を寄せ

ているのだ。

ただ、今回それに伴って、僕が再びショックに見舞われた事を最後につけ加えておこう。

12と14歳の3人組のグループが、ついにCDデビューする事になり、レコード会社が彼女達の母親を交えてささやかなパーティを開いた。グループの最年少、12歳の女の子の母親は、何と僕と同年だった

「出来る事から始めよう」「(一)ゴミを減らそう！

僕が現在のワンルームに引っ越しして来てからもう半年が過ぎた。約8畳の部屋が一つだけではあるが、それでも僕が初めて、誰にも干渉される事無く、自由に時間と空間を占拠できる”お城”である。

一人暮らしを始めた当初、ホームページ作成という目標もあって、少しでも為になるページの入った雑誌を片っ端から買いあさり、重要と思える所のみを切り取ってはファイル入れる。残った本はまとめてポイだが、生来の貧乏性？が幸いしてるのか、捨て方にはそれなりに気を遣ってはいる。

併せて自炊もする様になったのだが、やはりすぐに気付いたのが、「情報」や「知識」「栄養」を得る事に対して求められるエネルギーに負けない位に求められる「捨てる」事、「生活環境を維持する」事へのエネルギーである。

僕の住んでいる町内でも、2ヶ月に1回は子供会が廃品回収を行ってくれている。日曜日の朝に、それまでため込んだ雑誌や新聞、牛乳の空きパック等をまとめてアパートの玄関に出しておく、1時間もしないうちに回収に来てくれる。ただ、不思議な事に、定期的に行われているにも関わらず、こうして古新聞をまとめている人は、35人が毎この建物の中で、僕ともう一人いるだけである。僕は周りの人達より仕事への出勤が早く、且つ四階建ての一番上に住んでいる為、少なくともこの建物の住民の半分以上が新聞をとっている事を知ってはいる。にも関わらずである。

では、この廃品回収の日に古新聞を出さない人、何時？どうやって処分しているのだろう？

答えは日曜日、一階駐車場脇に置かれたダストBOXの中にすぐに見つけられた。週間分のゴミを一杯詰め込んだ大きなゴミ袋はたちまちBOXを一杯にし、月曜の朝はいつも入りきらない袋がBOXと同様の大きな山となっている。ゴミの中に、束ねられもせず無造作に捨てられた新聞がやたら目に付くし、分別ゴミの区別すらない。ビールの空缶もペットボトルも、雑誌もお菓子を食べた袋も、みんな一緒になっている。

都会の常ではあるだろうが、マンションの住民と話をする事は殆ど無い、たまに顔を合わせた時に挨拶をするだけだが、誰もが皆、当然ながら普通の人だし、綺麗な女性もいる。が、残念ながら、服装や車、(多分部屋も)は綺麗にする習慣は十分に綺麗にする習慣は身につけてはいるのに、「捨てる」まで気を配る人は殆どいない、と断言せざるを得ない。以前の仕事の得意先で、生ゴミを処理する機械を発明した社長がいたが、全然売れないとボヤいていた。

それを初めて目にした時は「すごい！」と思ったものだが、今になると、残念ではある

が、その社長には「都会人の生活をもっと冷静な目で見てみた方がよかったですね」と言わさせるを得ない。

日本海側でのロシアのタンカー座礁による原油の流出で、毎日の様にニュースでは環境の破壊が報道されている。その油の回収作業のボランティアに出かける人は、確かに立派である。でもそれを知って行かない人、行けない人にも、ぜひそれぞれの生活レベルの中で、身近な所で出来る環境への気配りを、何か一つでいい。考えて欲しいと思う。ドイツの様に、赤信号で止まる度にエンジンを切れと言われても、すぐには無理であるう。でも古新聞を平気で生ゴミと一緒に出してしまふ様な無神経さだけは、ぜひ考え直して頂きたいと思う。「決して僕らより豊かにはならない」と言われる僕らの次の世代に、気配り一つで、残せる物は、とんどん残していつて欲しい。と思つて病まない。

テクノロジーの進歩に僕が求める物

25個

何の数字だろうか？実はこれが、僕の、ワンルームの部屋の中に常時接続されている家電品の総数である。それも照明や換気扇、エアコンを除いた数である。

洗濯機を除いたそれらの全てを、全て部屋の中の、四つのコンセントから、タコ足配線で接続しているのだ。

2個所あるコンセントの内、1個所から冷蔵庫や炊飯器、電子レンジやポットへ電気が供給され、もう1個所の内一つを電話に、更にもう一つが「パワー・ディストリビュータ」と呼ばれる配電機へ、更にそこからMIDI機器やパソコン、プリンタ、携帯電話等の充電器等へと、S/W一つでいつでも全ての機器を動作させられる様にはなっている。但し、僕自身もつくづく思っている

多すぎる！

これだけ数が増えてしまった背景には、僕がMIDIを始めた91年当時は、まだDTMパソコン中心よりも、シンセサイザーや専用シーケンサ、更にリズムマシン等、個々の用途別に専用の器材を揃えるのがまだまだ一般的だったからだったし、(今でも本格的にやろうと思えばそれ位必要なのかも知れない)又、腕に自身が無くても、人に聴いてもらえる音楽を作るにはそれなりの投資が必要だと、当たり前のように考えていた。

以後、ことMIDIやパソコンに関しては、人々の想像をはるかに超える進歩を見せてくれた。MIDIをするにも、パソコンとMIDIコントローラ(キーボード)、GS又はGMの音源とMTRさえあれば、腕さえあればかなりの物が作れる様にはなってきた。色々な製品の資料を調べて、必要に応じて下取り/買い替えを検討してはいるのだが、一向に僕の部屋の家電品が減る傾向には無い。何故か？

例えば、16ChのミキサーとデジタルMTRを持つてはいるが、音源はSC8VLのみにした為に僕には16Chも必要が無くなった。とはいえ4Chではちょっと淋しいから、8Chのミキサーが付いたデジタルMTRが登場したら、この二つを下取りに買い換えようとは思っているが、かなりそれに近い機能を持つ機種が続々と登場して来ているにも関わらず本当に8Ch同時に録音出来る器材は未だに登場していない。

そもそも僕がノート・パソコンを支持するのも、テクノロジーの進歩を最も分かり易い形で与えてくれる”小さい”事と、欲しいと思った時にもうこれ以上電源を確保出来る余

裕が無かったからである。それにノートなら、モデムもカード型を使用すれば、電源はPC側から供給されるからその心配も無い。MIDIやステレオOUTの配線の膨大さにしこたま頭を悩まされて来た僕には、トータルでの機能に少し位の不足を感じても、セッティングがシンプルにまとまる方がずっと好ましく感じる。

幾多ものメーカーが未だに個々の製品の機能のみを追求しているだけに比べて、僕はSONYというメーカーは、少なくとも僕の望む形をいくらか与えてくれているメーカーだと思っている。MIDI関連で言えば、四つつのエフエクターの機能を1台に凝縮した製品などは、経済的にも省スペース的にも極めて有効だと思う。

僕が愛用しているCDROMドライブは、今時2倍速の「PRD150」だが、ソフトのインストールに使用するには今でも十分足りているし、それ以上に僕にとっては外出、仕事中の運転時等にCDを聴いたりする用途の方がはるかに多い。

最新のバーチャル・シンセを満足に鳴らすには、最新のMMXペンティアム搭載のPCでも「やつと」の状態である。でもその為に高価なPCを買わなくても、独立した製品（SC'88等）を用意すれば、僕が2年前に買った486SXのThinkPad 230（今なら探せば10万で買える！）でも、聴くだけなら十分である。

誰もがプロ・ミュージシャンを目指してる訳でも無いし、誰もが画家や映画監督を目指す訳でも無い。ほんの一時だけ、「その気分」に浸る事ができればいいだけだと思う。にも関わらず、一歩下がって最新の製品を見つめた時に、「ここまで必要だろうか?」とか、「ちよっと違うんじゃない?」とか思うのは、単に僕が若く無くなったからただだろうか?

「八十八夜」

ついこの間僕の住む街にも桜が咲いたと思ったら、今年の気象は少し覚悟をせねばならないらしく、5月初旬だと言つのに長袖を着ていては汗が止まらない。

ラジオから仕切りに「八十八夜ですねえ」という言葉が流れると、僕の脳裏に、かつて毎日宅配の仕事で走り回っていた地域の、茶畑の光景が浮かんだ。

「八十八夜」とは、ご存知の通り立春から数えて88日目だからその名が付いた。「あれに見えるは茶摘みじゃないか・・・」の唄にもある様に、この頃製茶農家は1年で最も忙しい時期を迎え、日曜日も関係なく新茶の生産／出荷に追われる日々が続く事になる。

ただ、この「八十八夜」。南北に長い日本では、この言葉がスバリ当てはまるのは静岡地方だけではないかと思う。少なくとも僕が訪れていた地域は、GWを過ぎてからもう少し半月の後半になってからが最盛期だったし・・・

でも熱心な日本茶ファンにとつては、八十八夜は常に新茶を求めるGOサインになるし、売る側にとつても年に一度の大切な「売り出し文句」になるから、この頃には既に新茶が商品として店頭に並んでいなければならない事になる。では業者の側はいかにしてこの時期に新茶を確保するのか？

日本で一番早く新茶の取れる所がある。鹿児島では、これらの地域がまだ雪に埋もれている2月の、立春を過ぎたあたりから、新茶の採取が可能だそうである。

中部地方の著名な製茶業者は、この八十八夜に際し生じるギャップを埋める為に、現地で新茶をせり落とし、輸送して自前の工場にて自社ブランドとして加工する。

「それでは・・・茶、とその地域の名前を名乗る事は出来ないじゃないか」という向きもあるかもしれない。ただ、この地域の製茶業者の名譽の為に言つと、お茶＝緑茶は、それぞれの農家が栽培する地域の環境＝高度や日当たり等＝によって微妙に味が違うそうである。それらは採取後、市場へと集められ、買い手側はサンプルを一つ一つ手に取り、口に含んで、(この作業が大変な刺激となる為、お茶に関わる人は皆胃腸を痛めるそうだ)自社ブランドに近い味を選択、もしくは各自が利そうとする味に近くなる様に「ブレンド」して行くのだそうだ。

だから我々「運ぶ」側にとつても、そうやってせり落とされ運びこまれたお茶という物には「代品」というのが存在しない。素人目には全て同じに見える1億5千万gのお茶は、全てが別々のシロモノの為に、普段以上に気を遣う商品でもあった。

この時期だけで年間の売り上げを殆どまかなうのだから、お茶だけでトラックを一杯にした時の金額たるやケタが違う。一般的にポピュラーなのが100010000円というクラスだから、それがトン単位になった時の総額たるや・・・(運転するのが恐かった)

日頃「カロリー0の健康食品」としてもてはやされ、ガンやエイズにさえも効果がある

と言われる緑茶だが、一つだけ・緑茶には体内の鉄分を外排出してしまう効果もある為に、貧血気味の方には飲み過ぎは禁物である。恥ずかしながら、若干僕にもその気がある為、お茶と言えば僕にとっては麦茶や玄米茶を指してしまふ。

かつてそんな山並みの中を、汗にまみれて過ごした日々。当時は都会派らしく？

都会の渚で仕事する事に焦がれていたけど、今はあの深い緑と、地域で馴染みだった素朴な人柄が恋しくてたまらない。

今年は暖かだから、もう既に皆忙しいだろうな

「5月の風」

久しぶりに深夜の長電話をした翌朝、僕の気分は予定より3時間遅れて目にした目覚まし時計に向かつて「おい、嘘だろう？」と文句を言いたくなる程重かった。

ぼんやりしていると、夕方までこのままで過ごしてしまいそうになる位になえた気力を、辛うじて公園まで車を走らせる所まで震い起こす。後は風任せ。

相変わらず無気力な頭の中に、草野球大会の選手先制の声

「・・・誓います！平成9年5月5日！」

「5月5日」の言葉が、かつてサーキットで燃えた最後の記憶となったあの日の時めき方を思い出させて、僕の目を木々の緑へと誘う。あの日と変らないまのエネルギーが僕の足を軽く走らせ、ゆっくり歩いていては感じる事の無い風を心地よく感じ、汗を一杯かいた後の、露店のかき氷を美味しくさせた。

僕の中に、燃やしたい情熱はまだいくらでもある。でもそれを助けてくれる「酸素」は、本当は自分の周りに一杯あって、自分がそれを、心開いて「欲しい」と強く望まないと、いつまで経っても気付かないままなんだと、改めて木々の緑に教えられた気がした。

それに改めて気がついただけでも、今日の大きな収穫。午後、再び長い昼寝を決め込んでしまったが、今日ばかりはそれも悪くないだろう。

連休最後の日に、改めて自分にとって大事な事に気付いただけでも。

「F1に乗りたい！」

HPにモータースポーツ関連のコーナーを設けている事もあって、その分野に興味や夢を持った方からのメールを頂く事があります。夢はまだ多いものの、少しばかりは”年相応に”自分に出来る事、出来ない事にある程度の線を引いてしまった僕にとって、「F-1を目指しています」という方のメールは、かつてそうであった自分の当時を思い出させてくれる様で、嬉しくも思います。

かつて僕がサーキットに情熱を燃やしていたSHOPには、「今度は完璧な趣味として」と割り切りながらも、新たにマシンを購入した事もあって 足を運ぶ機会もまた多くなりました。

雑談にふけっていると、時々店を訪れるのが、まだあだなさの抜けきらない16歳前後の少年。恐る恐る扉を開けて入って来て、

「カートをやりたいんですけど・・・」

不安と葛藤しながらも、何とかして自分の夢の扉を開けようとするその姿は正に16歳当時の自分そのもの。かつての僕も、こうして「F1に乗りたいです」と、初対面の主人に向かってそう言った一人でした。

何とかしてあげたい、という気持ちが半分と、現実には甘くない、という気持ちが半分。

「将来はF-1に乗りたい？」

「はい」

「レンタルカートに乗って『カートってどんなものか』を体験する所までは出来るけど、レースに出ようと思ったら、自分のマシンを持たなきゃいけないよ。その辺の資金的な問題はどうか分かってる？」

「・・・お父さんが会社で、僕の名義で貯金をしてくれていますので、それを充てようと思っています。」

「お父さんには『レースをやりたい』って言った？」

「・・・いえ、まだです・・・」

「そのお金は、確かに君のお父さんが、君の将来の為につて、残してくれているものだけど、ひよっとしたら『そういう使い方をする為に残してやっるんじゃない』って言うかも知れないよ」

「・・・・・・・・・・」

「まずは家の人と相談して、「カートをやるよ」って。了解を得てからでも遅くないから、それから改めて来なさい」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

彼は再び店を訪れる事は無かった。

彼の夢を僕自身が冷たく潰してしまった様な罪の意識も感じないではないが、

少なくともその最底辺のゴーカーでも、モーターの付くスポーツにはお金がかかる。18歳に満たない、免許証も持たない人には更に、マシンの運搬等で多くの障害が待っている。失礼な言い方だが、親の後ろに「バカ」がついていて、運搬やメカニックを進んでやってくれる存在がいる場合、少なくともある程度のレベルまでは何の問題も無く走りに専念出来るという点では、確かに羨ましく思う。

僕は一応、名古屋では初めて「高校生でカートに乗った」という意味では先駆けである。その背景に、カートをローンで買う際に親の名義が必要で、石頭の親父を泣き落として・・・という恥ずかしい場面もあるにはあったが、あとは全て、必要な資金は全てバイトでまかない（バイト禁止の学校に隠れて）、サーキット走行の際にはチームの大人の人達に頼み込んで・・・と、少ない資金の中、且つ肩身の狭い環境の中で少々窮屈な思いをしながらの活動でもあった。

「一番目」に高校生カーターとして現れた友人は、裕福な家庭の理解ある両親に恵まれて、マシンやエンジンを次々と新調しては上のクラスへと上がって行った。

当時の仲間でレースに遠征する際、夜の早い内に出発して、現地で朝まで車の中でゴロ寝、というのが当たり前の中、何の抵抗も無くビジネスホテルを皆に薦めたのも彼だった。（僕は「贅沢」と思えばかりだった。）

でもその友人は、高校を卒業して自分のクルマを手に入れると、殆どレースから身を引いてしまった。

逆に僕は、やっと動く程度の中古を手に入れて、カートを運ぶのにいちいち誰かに頭を下げねばならなかった事から開放され、レースのクラスも1ランク上げ、「レインタイヤ」も買える様になった。専門学校に通いながら夜はパン工場で夜明け前までバイト。眠いなんて思っているヒマもない位に忙しく動いていた一年だったと記憶している。高校当時と比べて稼ぎが倍近くになった事もあって、依然よりはかなりまともなレース活動が出来る様にはなった。

でもやりそれと持って生まれた才能とは関係無く、満足な成績を残すには全然至らなかった。にも関わらず「恐いもの知らず」だった僕は、休みを利用しては片っ端から市内の企業に電話をしまくって、F-3に乗る為のスポンサーを探し続けたものだった。一人だけ、やっと会ってくれた某百貨店の広報担当の方と面会した帰り、カート屋の主人にその事を話したら「物には『順序』ってものがあるからな」と言われた。

高校卒業後、1年間の専門学校在学中に自分の夢にケリをつけると息まいていたが、結局叶わず、卒業/就職と同時に、「F-1を目指す為の」カートからも身を引く事を決めた。

「貴重な経験」を僕に積ませてくれた、駅前百貨店のその課長には、今も感謝している。

「裕福な家庭」が夢実現の条件ではないというほんの一例を、僕の経験で交えたが、たまに同じ年の仲間にそんな環境の持ち主が現れて、様々な形で僕に屈辱やコンプレックスを抱かせてくれた事が、以後数年の僕にとって大きなエネルギーになった事は確かだと思う。後に過酷、且つ高収入の某社に入って、数年に渡り、かつてのうつぶんを晴らすかのごとく、贅沢な体制でカーブに参加していた事もあったが、それが出来たのも、20歳前はかなり無理をした経験が自信の裏付けとなったお陰だ。サーキットで散々クラッシュほ経験した事も、自動車を運転する時にいかなる条件に直面しても冷静に判断できる自信へと繋がっている。

「F1に乗りたい！」いいじゃないか。その夢を細かく分けて、今の君に出来る事から順番に、全力で解決させて行こうよ。一つ一つの問題やハードルを超えられた時、きっと君は以前の君より一歩大きくなっているはずだから。

「結果」じゃないよ。「全力を出す事」の方が大事なんだ。

「つばめ」

私的な生活環境が大きく変ったせいではあるのだが、(早い話が転職したんです) 前年までは、緑と空気と水に飽きる程恵まれていた環境から一転して、何かにつけて目の保養に困らない・・けどもう少し世間が静かだったらなあ・・という毎日に恵まれている。

インターネットが世の中の新しい主流の一つになって、僕のような平凡な人間にも情報発信出来る様になって、僕らの世代には長いのが主流だった女子高生のスカートも一転して短くなり・・という私的見解はよろしい。

あつて嬉しいもの、なくてもいいもの、見られて嬉しいもの、嬉しくないもの・・都会であろうが過疎の町であろうが、選択の余地も無く見せつけられる物、けど考えなければならぬ物はある。

街の中で仕事する様になって、見られなくなって一番淋しい物、けど、見てしまった中でも一番「見たくなかった!」物の一つが僕にとって「つばめ」なのである。

数年前、仕事で出入りしていたお宅の玄関、僕が背伸びして手が届くが届かないかの所に、つばめのつがいがある。この夫婦に限らず、僕が見る限り、つばめは地上から人間の手がギリギリで届かない程度の「低さ」の所に巣を作る。それより低いと当然人間の「害」に遭うわけだし、逆に高いと、雛が巣から落ちた時のダメージが大きい。殆どの巣が一階の軒下に作られ、二階の軒下に作られたのを見る事はまれだった。ひとつがいのツバメが巣を作り始めると、交代でド口を口にくわえて運び、コツコツと作り上げていくチームワークも去る事ながら、足元のフンの多さにも驚かされる事になる。でも巣を作られた家の主の側の中には、「これぞ春の訪れ」かのごとく、毎年の行事であるかの様に見守るところが、「夜は外では冷えるから」と言わんばかりに、玄関の引き戸に穴を空けてつばめが自由に家の中を自由に行き来出来る様にして、わざわざ家の玄関に巣を作れる様にした家も少なくなかった。当然玄関なんて昼間留守でも力ギなんかかかってない。

僕が毎日出入りしていたそのお宅のつばめ夫婦にも、やがて4羽の雛がかかる。両親のいない間はじつと外を向きながら、親鳥の帰りを待ち、目にするやいなや口を大きく開けて餌をねだる。とにかく元気だった。

梅雨が終わりを告げるか否かの間までに、雛はすっかり大きくなり、その巣から自分の翼で飛び立つ事が出来るのも時間の問題かと思われた。

ある日の事。夕方、いつもの様にそのお宅を訪ねた僕の目に飛び込んだのは、いつもは巣へと一直線に「帰還」する親鳥達が、夫婦揃って玄関の前を、けたたましく鳴きながら旋回している様だった。おまけにいつもは愛らしく吠えまくる犬までもが、じつとしてい

るままだった。

不思議さを解ききれないまま、いつもの様に軒先の巢に目をやった時の驚き様は今でも忘れない。

昨日まで元気に鳴いていた雛の代わりにそこにいたのは、巢一杯にとぐろを巻いて、雛丸呑みしようとしている蛇だった。

大きく口を開けて、雛を丸呑みせんとする蛇、そして上空でわが子が食われるのを鳴きながら見守るしかない親鳥達、なす術に散々迷ったあげく、僕は無我夢中で、玄関に置いてあった傘を持ち、その蛇を巢こと払い落とした。が、既に時遅く、地面に落ちた蛇の腹には既に三つの膨らみがあり、啜っていた雛は最後の一羽だった。その一羽も、食われる前に既にとぐろにまかれて窒息死させられていたらしく、ぴくりとも動かなかった。

そして、我が子の動かない様を見て、やっとあきらめがついたのか、二羽の親鳥は去っていった。

蛇はすぐさま床下へと逃げ失せ、後には僕と、一部始終を見ていた玄関の犬と、二度と動かない一羽の雛が残された。

やり場の無いやるせなさの余り、つい僕は犬に向かって「お前は黙って見ていただけなのか!!」と叫んでしまった(勿論鎖に繋がれている)余程その時の僕の顔が恐かったのか、その犬は当分の間、僕の顔を見ても大人しくしたままだった。

数時間後、一部始終を説明する為に電話した時、主人の奥さんは言葉を失った。

翌日、改めて会った家の主人によると、かなり前から蛇が床下から顔を出しては巢の様子を伺い、雛が大きくなるのをじっと待っていた様だったとの事。どれだけ高い所に巢を作っても、木造建築の家であれば、蛇は鱗を引つ掛けて楽々と柱をよじ登、簡単に雛を食べてしまふという事だった。

(更に後でも経験したが、一見つるつるに見える鉄骨の柱でさえもよじ登り、同様の「犯罪」をする事が確認されている)。

つまり、僕が目撃した出来事は何も今に始まった事では無く、主人によると「仮に飛び立てる様なつても、飛び方のヘタな内に」はやぶさ」に狙われたりして、ちゃんと大人になつて飛び立つて行くのは5回に1回位の事」という事。

そして丸一日経った後で僕が思ったのは、「ひょっとして僕って悪い事したんじゃないか?」という事だった。

確かに「可哀相」ではある。でも蛇にしてみれば、「これで食っている」のだ。僕が手を出さなければ、食べられた雛は確実に蛇の血になって、一つの命を生き長らえさせる糧となっていく。そして「奴等」は、それ以上の事は望んではない。少なくとも2万年前に僕が生きていたなら、僕も「奴等」と同じ様に「一番大きくなって」且つ「一番捕らえやすい」頃を見計らっていた事だろう。

ただ、僕の前では「蛇にいたずらしたら罰が当たるぞ」とか言っていたその主人も、再び別の親鳥が巣を作ろうとすると、徹底して追い払い、二度とその場所に巣を作らせない様になったそうだ。

「挑戦的イメージNO.1」の企業の戦士として働いていた中で、ひたすら自然を感じ、自然を愛した日々を送れた事を心から幸せに思う。

紅茶とゴルフ（２）

今では週に一度、それも１００球を打ち込む程度の熱の入れ様にはなったが、それでも、それなりに僕とゴルフは縁を切れないでいる。セットは６年前に買ったハーフ。それもしこたま土を掘った４Ｗはヒビが入って使用不能。飛距離はといえば５番アイアンでもやつと１５０Ｙ届く程度だし、１Ｗを持ったりしたら未だにどこへ球が飛んで行くか・

でも僕は好きである。例え人工芝であつても、広々とした緑の敷地と、広い空に向かって打ち込むのかやっぱ僕にも気持ちいい。一点を目掛けて、その目標を仕留んと集中する、その瞬間が好きなのだ。

だから僕は時として、必要以上に力みながらスイングする事が多い。でも、偉そうにしているコーチに教えてもらおうと思ったことは一度も無い。うまくなる為のゴルフでは無い、自分が楽しむ為のゴルフなんだから。

（でもそういうやり方は、いざコースに出ると、ひたすらアドレスの時間が長いクセにスコアが全然良くなかったりと、同伴者に嫌われる事請け合ひである事も確か）

ひとしきり汗をかいて、缶入りの紅茶を飲み干す頃には、回転運動で背筋はシャキッと伸び、酸素をしっかりと補給した頭の中がクリアになつてるのが分かる。これも又快感である。「打ちっ放し」に限って言えば、これ程手軽に、短時間に、それも一人でも十分楽しめるスポーツは無いと思つてゐる。「一人で」に拘り過ぎてもしけないが、こと普段の仕事でスーツを着る習慣の無い僕には、一人でも十分楽しめて、且つ身だしなみにある程度の配慮が求められる場所というのは重要だ。

以前、知り合いの女性に、せめて休日には少しでも外に出て運動してもらいたいと思い、自分のクラブよりも高価なセットをプレゼントした事があつたが、実は買う前に女性向けのゴルフ雑誌を買つて調べてみようと思つた所が人間違い。男性向けの雑誌と違つて技術的な記事などほんの僅か、クラブの広告に至つては一冊の中、１ページも載つてないという有り様だつたのに非常に驚いた。「コースに出る際のファッションは？」「芝生の上でも日焼けしないメイクは？」「アクセサリーあれこれ」「動きの妨げにならない下着の選び方は？」etc・・・後者に至つては「興味無くは無いけど、今はクラブの広告が見たいの！」と思つてしまつた次第である。

女友達にその事を話した時「女の子で本当に「好きだから」でゴルフする子っていないもんね」と来た。とりあえず仲間外れはイタだから、クラブはディスカウントで適当なのを探して、あとは「女に徹する」という訳らしい。男で僕のように「接待ゴルフ」をした経

験の無い者など珍しいのかも知れないが、女性に至っては、もっと「それ以前の」問題があったという訳なのかも。

もっともそれはバブル真っ盛りの頃の話。その雑誌はとうに廃刊に追い込まれ、僕の周りでもゴルフをやっているという独身女性の姿を余り多くは見なくなつた。

確かに練習場に行っても、やたらと大きな輸入車が目について、未だに「ちよつと余裕のあるヒトの」娯楽であるという感が否めない。でも何にしてもちよつとだけど、自分のスタンスをしつかり守っていれば、特にゴルフの練習場程手軽で、対費用効果の大きなスポーツでちよつと見当たらないと思う。モノにこだわればキリが無いのは釣りでもパソコンでも同じ事。(因みに僕は早朝のジョギングもしている)カートの練習だって走ろうと思えばコース行かなければならないし、そうすれば1万円は確実に必要だ。打ちっ放しならば平日でも、やりたいと思う時間だけ、2000円も出せば十分いい汗になる。Racing KARTのコーナーもある手前、こう言っている自分に矛盾を感じない事も無いですが・(笑)プロゴルフに限ってシニアツアーが存在するのもプレーヤーの息が長い証拠。事実プロゴルファーには長生きが多い。興味の無い人には退屈に見えてしまう「打って、歩いて、また打つ」事が、人間にとって一番優しい運動のリズムなのかも知れない

雑誌の広告で、有名な俳優が

「ぼくのゴルフは、スコアつけないの。おにぎり持って行って、食べながら、とかね。いいですが、食べますよってちゃんとキャディさんに断ってからね。飛ばすのが楽しみ。ナイスショットの2つ3つあればそれでいいの、問題無し。」(「AERA」23号、「パーリーゲイツ」の広告より)

思わず「今度行く機会があったなら、こんな風に回ってみたいな」と感じてしまった次第である。

自分の好きな時に、好きな方法で、好きなだけでいいから、もっと楽しく汗を流しましょう。

もっと体に酸素を一杯入れて、もっと一杯の時めきを素直に感じられます様に。

初めて見た自分のＨＰ？

コラムのコーナーにも書いたが、１年の時を経てかつての職場へと足を運んだのにはもうひとつの理由があった。言っては失礼だが、文字通り「過疎」のこの街。でもそれでもこの街で頑張ろうとするかつての顧客の内の数件が、自社のＨＰを作成し、公開した事を事前に知った。

だが、冷静になって考えるとチトおかしい事に僕はすぐ気がついた。実はその地域はまだ、市内通話料金で接続出来、なおかつＨＰを公開出来るプロバイダがまだ存在していないのである。かつて出入りしていた時の事を思い返すと、ＨＰを作成出来るだけの能力を持った方がいかも疑問だ（非常に失礼な事だが）

久しぶりに顔を出してみても笑顔の再開を果たした後、すぐにその話題になって「やはり」と思った。ＨＰに関する作業は、販売の拠点であるより都市部の営業所の若手が作業をしている為、生産及び発送の拠点であった現地の人達はこれらにはノータッチ。おじゃました２件のお客さんはどちらも、まだ自社のＨＰを見た事がなかったのだ。

ここで「イザという時の為に最小スペースの環境を」構築して来た僕の装備が役に立つ時が来た。実はハナからそれが目的で来たのだが、あらかじめ力バンにノートＰＣ／カラープリンタ／デジカメを詰めて持って行ったのである。早速事務所の電話線を拝借して接続。晴れて現れた自社のＨＰを始めて見た時の喜び様ときたら・・・ページごとに印刷してあげたから電話代もかなりかかったはずだが、絶対に怒られはしないだろう。（因みにその街から僕のプロバイダにアクセスすると、東京〓名古屋間位の電話料金がかかる！）

インターネットにＨＰを開くという事は、電子の空間に「お店」を持つ事。売る商品が無ければ何にもならないし、宣伝だつてしなくちゃ誰も寄ってはくれない。別に誰もが商売をしなきゃいけない事はないんだけど、

僕よりずっと高等なＪａｖａやＣＧＩを使っているながら僕よりアクセス数の少ないＨＰって結構多い。（勿論僕より二ヶタ三桁もアクセス数の多いＨＰはもっと多い！）数で全てを評価してはいけないけれど、「誰の為のＨＰ？」というのは、僕のＨＰを見に来てくださってるアナタも結構覚えありませんか？（おまえだあゝっだって？）

もうとつくにＨＰ持つてる程度じゃ何の自慢にもならないですよね。それをどう生かして行くのか？が問題。

自分が今まで曲を聴いてもらう為に学んだＨＰ作成の知識が、実際の社会や企業でどれだけ役に立っているのかが知りたい。けど今勤めている会社にわざわざＨＰで紹介したい事などなくんもないという事で、仕事で出入りしている販売会社にＨＰの作成／公開を提案し、新たに組んで下さったスタッフの方に、この私が一歩一歩お教えして行く事になりました。今まで体張ってする仕事ならいらでも教えて来た事はあるけど、仕事で「自分の机」

を持った事が皆無に等しい僕が机上でモノを教えるなんてまさに初体験。でも

「現実を直視した上で夢見ていたい」僕自身のテーマが、一体どこまで通用するかも、非常に興味があります。皆さんも一度、どこかで試してみては？

今時あつた「ひどい会社」へ退職したその日へ

HP上でこそ「アーティスト」を気取っている自分ではあるが、実際にはただのトラックの運転手である。ただしいて言えば、誰もが知ってる高給と重労働で有名な会社を二年に渡り「生き残った」事を誇りとしている。

でもそんな事はいざその企業を飛び出すと、往々にして役に立たない事が多い。むしろ「そういう妙なプライド」を捨てて、新しい社会や仲間と打ち解けなければならないのかも知れない。

しかしだからと言って、自分を安売りしてもいいと言う訳では無い。

前職を辞めてから、じつくりとHPの作成をマスターし、個人HPを開設。出来ればその類の職へと進みたかったが、いざ企業の枠の中で、自分なりに学んだ事がどれだけ役に立つのかが未知数だった。じつくり様子を伺う意味もあつて、とりあえずは慣れた業界へと、一応地域では中堅の会社へと再就職を決めたが、これがいけなかった。

まず周りにインターネットの話を出来る相手が誰もいない。「夢を持って夢を追って夢を食う」の社風から一転して、朝これから仕事という「元氣」を出さねばならない場面の朝礼で責任者は何と死刑囚の死刑執行までの日記を綴った本を「かわいい本だぞ」と薦める取締役の超マイナス思考。加えて最悪の労務管理と給与待遇。それでもそれなりにチャンスをついて、出入りしていた企業の幹部に営業展開の手段としてのHP開設を提案し、それが受け入れられて会社側がスタッフを選んできて自分がHP作成／開設までの指導を受け持つという機会を得、若い女性社員はみるみる内に知識を吸収して、今では自分より立派なHPを作る様になってしまった・・・

となると僕としてもこの現状に甘んじている理由はなくなり、又それなりに自身を植え付けた事もあつて退職を決意した。出来れば在職中に次の仕事を決めておきたかったのは言うまでも無いが、自分が担当していたその企業が年末に急激に多忙になる酒類販売業の為帰宅出来る時間が定まらない。これでは面接の時間を約束しても自分が守れない恐れがあり、またこの会社側に対してネット関連の知識を発揮出来たという機会を与えてくれたという恩返しの意味も含めて、敢えて繁忙期の最後までをこの会社の一員として働き、職探しは年が明けてからと決める事にした。

そして最終日の30日。お礼を言いに出向いた経営幹部から、逆に「有り難うございました」と、何と5万円もの商品券を頂いてしまった。「インターネット」に手を染めてから初めて受け取った報酬に、真剣に涙が出た。サラリーマンとして当たり前の仕事をこなして得た金額ではない。生まれて初めて、自分の力で何かを提案して、身につけた知識を生かして得た初めての報酬である。

そして自分の会社に到着後、会社の仲間が僕の為に送別会を開いてくれた。が、これが

事あるごとに労務管理で衝突していた営業所の責任者のシャクに触り、仲間が電話で呼び出されるという事態になった。

「やるべき事をやって退社した後仲間を送別会を開いて何が悪い！」と食ってかかる先輩社員を、その営業責任者は事務所の外に呼び出し、何をするのかと思って外から見ていると、何と自分の車から木刀を取り出してその先輩社員に殴り掛かって来たではないか！

これには残っていた周りの社員もびっくり。慌てて押さえつけ、やっとの事で「事件」にならずに済んだという有り様。入社の面接の際にこの人物に会わなかった事をつくづく後悔したものだったが、最後の最後になってそれが誰の目にも明らかなものとなってしまった。さっきまでの喜びも心地よい酔いも、一瞬にして失せてしまった。

「ひどい会社だった」と思うしかない。来年こそささやかでもいい、「夢」を語り合える職場や仲間と出会おうと心から願おう。

特別企画「貴方は見ました?『紅白歌合戦』」

・SPEED

TVでロパクではない唄を聴かせてくれたのって初めてじゃないか?と思わせた。マイク・スタンドを立てて控えめの振り付けで歌ったシーンに貴方はお気付きでしたか?

因みに僕の御氣に入りの子の名前は「ひろこ」ちゃんでした(今日知った)でもこの時間には13歳をTVに出してもいいのか?

・TOKIO

顔はよくバラエティ番組で見て知ってたが、実際に歌っているのを初めて見た。でも彼らが唄う前に飛び出た細川たかしのウケないギャグははつきりいつて「しょうもない」

・広末涼子

もっとじっくり見ていたかったけど、これ書いてて見逃した。

・反町隆史

折角人前で、それも紅白という名誉ある舞台で唄わせてもらえるんだから、もっと笑顔だせよ!ラストの「蛍の光」もポケットに手突っ込んで唄うな。そういう生意気はすぐに人気落ちるぞ

・松たか子

日頃あちこちで心地よく耳に届いた唄の歌い手がまさか昨年司会を努めた彼女だったと今更ながながら知った。

・シャ乱Q

一緒にコタツで見ていた母親曰く「去年はもっとケバかったよねえ」

(因みにこれは番組と同時進行でノートPCでリアルタイム作成しています。この芸当はデスクトップにや出来まい!<<<)

・藤井フミヤ

出場唯一の同年。くやしいけど奴の方がずっと若い。これからも頑張り続けて欲しい。

・森高千里

かつてのオーラに陰り?CMの奥様役の影響大?

・S M A P

ここまでの時点で昨年まで堂々と蔓延していた「バク」は世間の非難を浴びて消滅か？
そして流石は当世代最大のアイドル。かつての少年隊を彷彿とさせるダンスば流石だったものの、「ダイナマイト」のサビの部分が毎朝流れて来るCDの曲と全く同じ様に誰かさんの声が裏返っていたのは何でなんだ？
ダンスがハードだったから許す。

・Le Couple

デジタル・サウンド全盛の中でホッとさせてくれるアコースティック・ギターが心地よい
(でも再度言う。「もっと笑ってよ！」)

・郷ひろみ、西城秀樹

共に言う事無し、永遠且つ最高のスーパー・スター達。「本物」を子供の時からずっと見
せ続けて来てくれた事にひたすら感謝。BGMがいくらCP化してもボーカルだけは「心
で唄う」事を教えてくれる。

・佐ノ山親方

和田アキ子と同じくトランペット演奏に驚き！因みに僕はボーンは吹けるがペットが吹け
ないだけに尚更。

・美川憲一・小林幸子

ご存知紅白名物の衣装競争。加熱し過ぎて死者が出ない事を祈るのみ。

・J A P A N

8年にして解散はさておき、予ねてから僕には理解出来なかった人気。今でもわからない。

・由紀さおり・安田祥子

番組中で最も僕を釘付けにしたデュエット。”流石はプロフェショナル”

・加山雄三

急造のスペシャル・バンドこそ紅白の醍醐味。視聴率もピークを迎えてたのでは？

・安室奈美恵

昨年程の社会的影響は感じられなかった様に思えたのだが入籍／妊娠による「おめでと
う票」？だったら77年のキャンディーズにはどうして大衆賞もなかったんだ？（お前話
題が古すぎるぞ）

皆さん、楽しいお正月を！

「寒い朝」(98年1月)

僕は朝、ジョギングをするのに近所の公園まで車を走らせる。公園まで走って行けばいいだろうと言われるかも知れないが、僕の場合長年勤めて来た集配の仕事の影響でひざの関節がもろい。同時に少年時代より続けて来たカートで、振動から体を支える為に踏ん張る為にステアリングを支えるフレームをしつかりと両ひざで抱え込んでいたせいもある。だから走る時は柔らかい土の上でないと、後でダメージが大きい。自転車をこいでたら、帰り道に体が冷えてしまつて風邪のもとである。

今朝、初めて車のフロント・ガラスが凍り付いていた。因みに今朝の名古屋の気は零度。雪国の方に言わせればどうって事の無い気温だが、都会は些細な凍結や雪に弱いのは先日の東京で実証済みである。その日のニュースで、トラックの運ちゃんが、ここぞと言わんばかりに「みんな雪をなめているよ。チェーン持っていないでしょう?」と言つたのが印象的だったが、まあ間違いでは無い。それと気に留めておかねばならないのはチェーンを巻くのに「危ない」と思つてからでは遅いという事。そうと気が付いてからではチェーンを巻ける場所まで移動させられない。今朝の「零度」という気温も、僕にとっては我慢出来ない程ではない。何せ前期した集配業務と言うのが「夏は涼しく冬は厳しい」そこそこ雪害に悩まされる地域。僕の机の上には忙しかった合間を縫つて撮った当時の写真が数枚。清流で親しまれ、夏はアユ釣りで賑う川の水が凍り付いた時のものや、(因みに当日の現地の最低気温が零下20℃!)タイヤを半分雪に埋まらせて、サスペンションで「雪かき」しながら走つた物も。実際にはまだ「安全だから」撮れたわけで、写真など撮る所ではない位もつとひどい時もあり、そんな中で峠道で脱輪させて、日も暮れて暗くなつて気温も零下10℃近くまで下がつた中、クレーン車を呼んで(これも一人乗りの為、僕はクレーンにしがみついて現場に!)2時間をかけてトラックを引っ張り出した時の事は今でも忘れない。

(帰社後、事情も聞かずに「何やつてたんだ!」と怒鳴り散らしてくれた上司の顔はもつと忘れない!)(笑)

昨年の仕事は、大雪の国道で丸1日を車内で過ごすという事も経験した。今の生活が余りに平和過ぎて、またもう一度「あの地獄を経験してみたい」と思うこの頃。でももうしたくても出来ない。僕が担当していた集配コースは、僕の退社後 地域的に赤字を免れないのと、雪道を走りぬいて業務をこなせる者がいなくなった為に、外部の下請け会社に依頼となつてしまつたから。

「成人の日」

あいにくの雨降りという天気ではあるが、「成人の日」という事で、ラジオもやたら新成人が生れた20年前のヒット曲続けて流れてくる。でも僕にとっては実に有り難い。

高校入試の翌日に自転車に乗ってプレイガイドで前売り券を買って、親に黙ってこっそり入ったキャンディーズのさよならコンサート。そして4月4日の解散。翌日は高校の入学式だったというのに、何故か卒業した様な寂しい気持ちで望んだっけ。

でも、間もなく同じ部屋ですっと八チあわせだった兄貴が大学入学と同時に寮に入ったお陰でどつぷりとまでは行かない物の「孤独」を味わえる様になったのと、入学祝いに買ってもらったラジカセが僕をFMの世界の導いてくれたお陰で、イッキに勉強しなくなっ成績も3年間ビリを独走しながらも、夜半前はFMの音楽を、過ぎはAMの深夜放送を、兎に角聴きまくった。折しも折り、「歌謡曲」が「ニュー・ミュージック」と劇的な変貌を始め、松山千春、サザン他現在も活躍するビッグ・ネームがこの頃デビュー。谷村真司や堀地孝夫の「アリス」が全盛期を向かえ、「カーペンターズ」もまだまだ現役だった。(僕自身の本格的なブレイクは、翌79年、僕にとって「教祖」的存在の新田一郎が「SPECTRUM」を率いて登場して来てからだったが)

77年の日本GPで発生した不幸な事故の為に下火になりかけたF1だったが、この年の映画「ポール・ポジション」でイッキに目覚め、事もあるうに野球部を辞めてバイトに勤しみカートを買ってサーキットに「F1目指して!」飛び出したのもこの頃。ラウダ、ハント、アンドレッティ、ビルヌーブ、(父)・決して多くない情報が余計に創造を駆り立て、彼らを「神格化」させた。未だ持ってファンの間で指示されているF1漫画「赤いペガサス」の作者、村上也とかは連載中は何とまだ運転免許証を持っていなかった。でも僕らは酔いしれた。

学校ではコンピュータの授業があつたが、命令文の一字間違えただけできちん動いて暮れなかった融通の効かなさが大嫌いであまらなかった。それが今じゃ部屋に3台もあるとは(笑)

久々に見る「キャンディーズ・ファイナル・カーニバル」のビデオ。今はもうない後樂園球場を埋め尽くした5万5千の熱い大歓声。共に叫び、涙した世代が今、激しい社会の荒波の真っ只中にいる。

今日は思い切りあの頃の音楽でも聴いて、恐いもの知らずだった当時自分に帰ってみませんか？

明日に向かっての少しでも「元気」を取り戻して暮れば幸いです。

「手放して喜べない『感動』」――長野オリンピック――

スケートの清水、ジャンプの原田、舟木と、この所TVを見る度に「感動の嵐」である。お陰で「TVは1日1時間まで」と決めていたのが、五輪が終わるまでの間守られそうにない。思えば独り暮らしを始めた一昨年。「TVを見る為に部屋を借りたんじゃない！」と数ヶ月に渡ってTV無しの生活を実践した物の、それをあつさりと覆してくれたのもアトランタ五輪だった。

LH団体で金メダルを獲得して、ひたすら号泣しまくる原田（実は僕も4年前、猛烈に彼を批判した側だったのだが・・・その姿を見て、数年前の自分のある姿と重なった。

しかし、残念だが事実の記憶の世界の事では無い。「想像」イメージの世界の話である。

もう7年前になる。「最後のカート・レース」と心に決めてかかったその前の晩、僕はひたすら翌日のレースの展開をイメージしていた。「Nと一緒に走れたらいいな・・・」して当日、事もあろうに決勝グリッドは何とそのN君がポールで僕がその隣、「最後のレース」と決めたその瞬間に、神様が最高の場面を用意してくれた、と、僕はスタート前にそつと一人で天を仰ぎ、神様に感謝した。

88年のサラエボ五輪でスケートの黒岩が因縁とも言える「4組アウト」でスタートするその前に「何もし残り残す事は無い」と思ったという、正にその心境である。

残念ながらレースは、わずか2周とはいえ誰も驚く壮絶なバトルを展開して終わってしまった。とはいえ、全力を出し切った事に変わりはなく、レース後の僕はただ満足感に浸っていた。

イメージしていたレースは勿論、最後の最後までバトルしまくって僕が最終コーナーで彼を抜き去って優勝するという展開まで出来上がっていた。（当たり前と言えば当たり前）のだが、もし、それが現実となっていたら、きっと僕あたり構わず抱き着いて泣きまわっていたに違いない。

それが今回の原田とダブってしまったのである。本当に100%の力を出し切ったからこそ、あれだけ泣けたのだろう。

僕自身は今でもあの「シナリオ」が完結されなかったのは、次の人生のステージでそれを開花させると、神様が告げたのだと信じている。

そしてそれは誰にでも言える事だと思つ。

与えられるドラマで感動する事は誰にでも出来る。でも自身の人生で最高の感動を作り上げるのはその人自身である。誰にでも、原田に負けない「感動」の人生の名場面を作る可能性は残されている。

そしてそれは、自分が自分を「どこまで信じられるか」にかかっていると思つ。

この世に生ある限り、僕は自分を信じ続けて行きたいと思つ。

「夢を諦めないで」」「ママは小学^々年生」より」

僕が今住んでいる部屋にはケーブルTVが標準で装備されている。TV自体を見る事があまり無いのだが、接続料金が家賃に組み込まれていて、「見ないよ」と宣言しても家賃が安くなる事はないのでそのままにしていた。チューナーを付ければ衛星放送も見られると気付いたのは、最近この局のHPを発見してから。(宣伝が足りんぞ) そうでない時には、アニメ専門のチャンネルだけが写るという仕組みである。

たまたま遊びに連れてきた兄貴の子供達に見せた所が案の定大好評で、放送を「デオ」に撮っておくという宿題まで仰せつかってしまった。それが上記のタイトル名の番組である。最低1年は放映された番組らしいから、初回放映時こそこの人気だった事が伺える。その中の1本だけ、僕ですら深く感銘を受けたストーリーがあつたのでご紹介する。

水木なつみ(主人公)はロンドンに住んでいる母親と離れて、自宅で叔母(母の妹、10歳以上歳が離れている姉妹)と二人暮らし。ある日突然5年後の未来から、なつみが5年後に産んだ赤ちゃん「未来ちゃん」がタイム・スリップしてやって来た・・
(まずメチャクチャな設定だけど・・本題はこれから)

なつみの叔母は中々芽の出ないアクション漫画家の卵。なつみが夏休みのある日「週間おげれつ」(＜)から電話が入り、有名作家の原稿を編集者が無くしてしまった為に、明日の朝までに16ページの漫画を書き上げて欲しいという又とない仕事の依頼。本人はヤル気十分なのだが、アシスタントを手伝ってくれる仲間がいない。そこへたまたま遊びにきたなつみの友達3人がやってきて、4人で原稿作成の手伝いをする事になった。

所がこのなつみの叔母さん、書く漫画がちつとも面白くない。同級生の大介(なんこの子が将来の「未来」ちゃんの父親)に「女にハード・ボイルドは無理だよ」と言われてもちつとも聞かない。かくして時は流れて朝の5時。疲労困ぱい、漫画を書くネタも尽きた叔母さんはいよいよキレて騒ぎ出す。

「あたしの漫画って面白くないか？ハッキリ言っておくれよ！」悲痛な面持ちで問い掛ける叔母に、それまで何度もお世辞を言ってたなつみは遂に

「面白くない。叔母さんにそんな漫画似合わないよ」とぶつけた。

それでも何とか、約束の午前8時に原稿は完成。疲れもいっぺんに吹き飛んで喜ぶ叔母だったが、直後に編集部から

「先生の原稿が見つかったから君の漫画は要らなくなった」
との電話。

途方に暮れる叔母だったが、這い寄ってきた未来ちゃんに笑顔を取り戻し、「あの原稿、ボツになってよかったのかも知れないね」といつもの元氣を取り戻す。

何を隠そう現在転職浪人中の我が身。「やりたい事」と「出来る事」のギャップを身に染みて感じるこの頃ではあるけど、何となく元氣付けられた気がする。僕も早く仕事探そうと。

「目」の体操

今日はちょっと「目」についての話題。インターネットやら通信やらと長い事ディスプレイを眺めていますと、後ですぐクルマに乗ったりした時にちよつと恐い思いをする事が時々あります。これはパソコンが目に見えるのでは無く、長時間に渡って距離や位置、明るさが一定の条件で目に仕事をさせている為に、目を動かす神経の働きが鈍くなるからではないか？と考えられます。この後車を運転する状態に変わると、様々な危険予測の為に、前後左右の車の動きや、動く速さの違う歩行者や自転車、果ては静止状態の物にまで注意を配るという、目にとっては一転してクソ忙しい状態に晒される為、「アタマじゃ分かっているけど目がついていけない」為にアブナイ目に出くわすという事が考えられます。（医学的な根拠は全く無いですが、念の為（笑）

そこで、どこでも気軽に出来る「目の体操」なんぞを。

- ・両手を「前習え」の状態に
 - ・更に90度位の角度が出来る様に両手を広げ、人差し指を立てる
 - ・顔を動かさずに、眼球の動きだけで左右の人差し指を交互に見る
 - ・更に「右手を上げて左手を下げて」と段を作って、斜めの動きをさせる
反対もやってみる
 - ・目の視界一杯の範囲で眼球をグルグルと回してみる。
- あと「遠くの景色を見る」事で気分転換出来れば尚善し

これだけでも「気分的に」ではありますが、かなり疲れた時でも目はスッキリしますよ。騙されたと思って一度お試しあれ。

PS・余談ですが、人間の目が200度程度の視界を有するのに対して、馬は330度位の範囲が見えているそうです。だから競馬等で騎手がムチを打つ時でも、実際には「打つ構えをする」だけで馬には見えているそうなので、それだけでかなり反応してしまつそうです。

(98年8月14日)

「僕も幸せだった」～キャンディーズ解散から20年～

今更自慢するでもないが、春先には僕はWWWを介して片っ端からTV局にメールをしまくって「解散20周年の特番を組んで下さい」と訴えた。あいにくちょっと思い付いたのが遅くて解散した4月4日の2週間位前。これじゃいくら何でも間に合わないわなあ、と思ってたが、今夜願いは適えられた。

今でも鮮明に記憶に残る当時のひとコマひとコマ。それは僕だけでは無く、当時の青春をキャンディーズと共に生きた全ての人にとっても同じ事。「普通の女の子に戻りたい」から始まったドラマは確実に日本を一つにして、最後のシングルのオリコン1位は、現在のマーケティング戦略とは程遠い、ファン一人一人の「草の根」的活動によって勝ち得た勲章。そして後楽園の最後のステージを思い浮かべながら、次の日、入学式だというのにまるで卒業式に向かう様な気持ちで挑み、始まった高校生活。

中学当時、プラスバンドでクラシックに洗脳された僕にとっても、キャンディーズだけは「例外」だった。

レコードすら満足に買えない少年が多かったあの頃、ラジオから流れる決して良くない音を必死で心を澄ましていた時代。その後バイトをして買った5枚組LPは、この20年間で未だに2回しか針を落としていない。音が擦り切れるのが恐かったから、必死で聴いてた。

後から買った復刻版CDの音は、思い出が思い出で無くなる気がして、好きになれなかった。

通信の手段がまだ、一家に一台の電話しかなかった時代。誰もが夜は一人で孤独の中、夢を描き、想いを暖めて、ラジオを友達に眠った時代。耳に届く音楽の全てが心に優しくった時代。

「有終の美」が限りなくロマンチックだったあの頃を、最も多感な10代半ばで過ごせた事を、心から幸せに思う。

(1988年9月15日)